

自然と共に生きる人間として

上廣哲治

あれからもう七年の歳月が経ちました。春が近づいた際に、二〇一一年三月十一日に起きた東日本大震災を思い出さずにはいられません。マグニチュード九の地震は、最大震度七を記録し、その後押し寄せた大津波は沿岸の家々、車や公共建造物などを次々と呑みこみ、東北太平洋沿岸地域に壊滅的な被害をもたらしました。テレビ画面を通して伝えられる惨事を、多くの人々は息をのんで見守り、被災者の無事を祈ることしかできませんでした。しかし残念ながら、死者およそ一万六千人、依然として二千人もの人々が行方不明となる未曾有の大災害となつてしまつたのです。

私たちはその被害の大きさから、つい東日本大震災だけに目がゆきがちですが、この七年間にはほかにさまざまな自然災害が起こり、多くの方々が犠牲になつておられることを忘れてはなりません。昨年の九州北部豪雨や、一昨年に起きた熊本地震。二〇一五年の口永良部島新岳の噴火では、全島民が避難しました。それ以外にも台風や豪雪など数多くの自然災害が起きています。

なぜ、わが国には自然災害が多いのでしょうか。それは国土の置かれた位置が深く関係しています。ユーラシア大陸の東、太平洋の西の縁にある南北に細長い地形は、豊かな自然に恵まれていると同時に地震や台風、豪雨や豪雪といった自然災害が発生しやすい場所なのです。国土は世界の陸地面積全体のわずか〇・二五パーセントしかありませんが、世界で発生したマグニチュード六以上の地震の約二一パーセントはわが国で起き、世界全体の災害被害額の約一八パーセントを占めています。他の国々に比べると、自然は豊かで恵まれているのですが、いかに厳しい自然環境にあるかがよくわかります。

ですから昔から日本人は、災害を抑え込もうとはせずに、それをたわめて受け入れ、被害をできるだけ少なくすることに知恵を絞ってきたのでした。

戦国の武将、武田信玄が築かせた「信玄堤」は、堤防のところどころに開口部をつくり、勢いよく流れる川の一部をそこに導くことで流れの勢いを弱め、大きな氾濫を防ぎました。頑丈な堤防をつくって氾濫を防ぐ現在の治水法とは正反対の考えです。五重塔も全体を木組みでつくり、中央を貫く心柱を一つだけ本体とつなぎ、地震の振動を弱める工夫がされています。これも、石で強固につくられた西欧の建物とは異なります。足を踏ん張って強風に耐えるのではなく、柳が風をやり過すように自然の災害の力をかわすことで倒壊を防いでいるのです。

日本人はこうして自然に立ち向かい、力でねじ伏せるのではなく、自然の力をたわめて自然と共に生きる道を選んできた、いや、選ばざるを得なかったのです。ところが西欧文明による近代化が進むと、人間は科学技術の力によつて、自然に立ち向かおうと考えるようになりました。物理学者でエッセイストの寺田寅彦は一九三四年、「天災と国防」という随筆で次のように指摘しています。

「文明が進むに従つて人間は次第に自然を征服しようとする野心を生じた。そうして重力に逆らい、風

圧水力に抗するような色々な造営物を作った。……天晴れ自然の暴威を封じ込めたつもりになっていると、どうかした拍子に檻を破った猛獣の大群のように、自然が暴れ出して高樓を倒潰せしめ堤防を崩壊させて人命を危うくし財産を滅ぼす。その災禍を起こさせたもとの起こりは天然に反抗する人間の細工であると云つても不当ではないはずである」

寺田寅彦は別のところで、文明が発達し、自然を抑え込もうとすればするほど災害の被害は大きくなると書いています。それは、東日本大震災の後に起きた福島第一原子力発電所の事故を見れば明らかです。これこそ自然に対する人間の驕りが引き起こしたものです。

人間は、自分たちの手に負えない原子力という猛獣を原子炉という頑丈な檻に入れて働かせ、そこから電力を取り出して、快適な暮らしを享受してきました。ところが頑丈なはずの檻も自然の力には勝てず、猛獣は原子炉建屋を次々と爆発させて暴れ出し、放射性物質を広い地域に撒き散らしたのです。これは、原子力を制御できると考えた人間の思いあがり引き起こした人災といえるでしょう。

この事故は、震災による被害とは別の問いを私たちに投げかけています。自然を征服すべき対象とみる近代文明の恩恵を受けるなかで、それをすべて否定することなく自然と共生するにはどうしたらいいのか、という問題です。そのためには文明に潜む驕りを捨て、自然への畏敬の念を取り戻す。つまりこれまでわが会が唱えつづけてきた「自然との共生」に立ち戻ることが求められています。

三十年間の苦闘の末、「奇跡のリンゴ」と呼ばれる世界初の無農薬リンゴの栽培に成功した木村秋則さんが達した境地は、まさに自然との共生なくして人類は生き延びられないというものでした。リンゴは病害虫に弱く、現在でも自然栽培することは難しいといわれています。木村さんも当初は農

薬を使って栽培していました。農薬を使っても安全なリンゴをつくることができるからです。

ところが、農薬を散布するたびに、一緒に農作業をしていた奥さんが一週間ほど寝込むようになりました。そこで木村さんは一念発起して農薬を一切使わずにリンゴをつくることを決意します。

それから三十年の苦闘を通して、木村さんが到達した思いは次のようなものでした。「リンゴの木は、リンゴの木だけで生きていくわけではない。周りの自然の中で生かされている生き物なわけだ。人間もそうなんだよ」「どんなに科学が進んでも、人間は自然から離れて生きていくことは出来ないんだよ。だって人間そのものが、自然の産物なんだからな。……心から(そう) 思えるかどうか。人間の未来はそこにかかっていると私は思う」(『奇跡のリンゴ』石川拓治)

これこそが自然と共に生きる心構えではないでしょうか。私たちは今、大きな災害の事後を生きると同時に、やがてくる災害の前を生きています。私たちにできることは、被害を抑えるべく知恵を出して助け合い、家族や近隣の絆を強めて災害に備えることです。自然は災害を通して、人と人との絆の大切さを気づかせようとしているのではないのでしょうか。

そこで今月の実践課題です。今こそ、老若男女が共に手を携え、世代間の絆を深めて生きる喜びを実感するときです。年初、名誉会長は「世代間の自由で活発なコミュニケーション」を提唱されました。高齢者は伝統と信念、そして経験を伝える。それを踏まえて、若い世代は新しい感覚でアイデアと力を出し合い、それを家庭から近隣へ、そして社会全体へと押し広げることによって共生社会を実現させるのです。世代間で活発になった対話から生まれる「知恵と工夫」こそが、日々出来湧く事象すべてを柔軟に受け入れ、自然と共に生きる力の源泉となるのです。